

シンポジウム

持続可能な社会と鍼灸

司会：形井秀一；洞峰パーク鍼灸院、小野直哉；未来工学研究所

シンポジスト：熊野英介；アマタホールディングス株式会社、

舟木宏直；佛教大学大学院、小野直哉、形井秀一

形井：熊野先生、小野先生、舟木先生、今井先生、それから形井の5名でシンポジウムを行いますので、5名の方はミュートとビデオの停止を外して頂けますでしょうか。それから、小野先生と私が2人で司会を務めます。小野先生宜しくお願い致します。

小野：よろしくお願ひします。

形井：まずは、ご発表頂いた各先生方で補足あるいは発表頂いた他の先生に質問等ありましたら、出して頂くところから始めたいと思います。いかがでしょうか。

小野：私から、一つ補足です。ご参考までに皆さんにお話ししますが、今年の3月にアメリカで「グローバルトレンド 2040」という報告書が出されました。この報告書は、アメリカ国内の多様なシンクタンクの集合体により作成されたもので、今後、世界はどのような社会になっていくかを新任のアメリカ大統領に教授することを目的としています。基本的には、アメリカ大統領が変わるたびに出される報告書です。バイデン大統領就任に伴い作成された「グローバルトレンド 2040」のキーワードは、これまでの「軍事、経済、エネルギー」から、「環境、経済、エネルギー」に変わりました。つまり、これまでの社会に影響を与えていた「軍事」が変わり、これからの社会に影響を与えるのは「環境」であると言えます。

形井：ありがとうございます。それでは熊野先生、先生のお話で最後におっしゃったことは、現状の社会を変えていかななくてはならないということで、しかし、最終的に社会を構成する個人が意識を変えなければ社会は変わっていかないだろうというところが、先生のご指摘だったと思うのですが。意識を変えるためにこんなことをすればいいということがありますでしょうか。

熊野：端的に言えば、国家がなくて金融が機能しないときには人々は混乱すると思うのです。その時に人々が、希望を失っているかということ、生活は動いているので、生活を拠点にして、経済が始まるのです。わかりやすくいうと「闇市」なんです。国家が未熟な場合は幸せじゃないかということ、近代国家の未熟なところでも笑い声、幸せはあるわけなんです。

我々は、知らず知らずこうでなくてはならないという、規範とか構造的なことに縛られていると思います。その構造的な基準が、「持続的な経済のための健全な一員にならなくてはならない」という構造です。本当は、健全な社会のための健全な経済をどうつくるかを考えなければならぬと思います。経済のための社会の一員になってしまっています。これを違うと言ったのが、10年前の大震災の3・11だったと思います。貯金通帳は流されて、水道は止まり、水も飲めないという中で絶望の淵に留まってしまったかということ、そうでもなくて、あの人が生きていたとか、日々現場では希望を見つけていた。人の気持ちが動いたのです。ここに大きなヒントの1つがあります。今、僕らは自由になろうとすればするだけ不自由です。SNSでも、余計なことを言わないでおこうとする。このような現実を見て、構造的なことを変えるというよりも、生活の中を変えるというレベルで、それが豊かに変われば、経済はそれでいいのだとスイッチすればいいのだと思います。生活を豊かにするという事は想像力なのです。小学校の時から専門性を育てるようなことをしている管理教育の中で、我々は道具がなければ遊べない子どもにしていったわけです。そうではなくて、社会性というものをもう1回見直す時期

に来ていていると思います。それさえ直せば、最小限の経済でも笑い声が聞こえる社会になる。大分端折ってしまったのですが、僕らは近代社会になったところで、有名な国富論の洗礼を受けて、能力の高い国民が増えれば増えるほど、国富が高くなるという1つの方程式を持ってしまったのです。ですので、経済力がない国は三流国であると、民族差別まで生んでしまう。でも、エチオピア文化と日本文化に差はないわけです。そういう人間の本能的に持ってきた英知の復活が今必要だと思います。それが、豊かな社会をどう作るかということになると思います。

形井：わかりました。ありがとうございます。そうすると、舟木先生、今の熊野先生の視点、お話と、舟木先生のお話は一見遠い位置にあるように見えるのですが、実は360度戻って、一致しているということが言えると思うのです。今のお話を聞いて、舟木先生がお話された生活の中のお灸の視点から考えられるとどういうふうにお考えでしょうか。

舟木：現在、我々鍼灸師は鍼灸院の経営を考えなければならず、そのため治療とお金を稼ぐことが密接に関係していると思っています。しかし、地域社会の中で行われてきたお灸というのは、そういったこととは無関係であり、金銭を得るためではなくて、共同体に属する人々の健康の維持を目的としています。また、地域社会のお灸は、互いの健康維持だけでなく、灸点を下ろす人物や有償・無償の施術を行う者、家族など、治療には複数人が関わり、その中でコミュニケーションが生まれていました。施灸を通じて、地域社会における人と人との交流が成り立っていた可能性というのがあると思うのです。ややまとまりが悪いですが、現代の資本主義社会のなかで行われる灸とは異なり、地域のコミュニケーションツールという役割を担っていたのではないかと思います。

形井：そうすると、経済的な合理性という、資本主義ということまで行かなくていいと思います。経済的をうまく回すための手

段として、あるいは、治療を提供してお金をもらって生活するという発想を否定するということではないですが、地域の健康というものを高めるという意味を含めたコミュニケーションツールだと思うのですが、そういうようなものとしても、今後日本で、あるいは資本主義社会の中で、そういう機能が何か芽生えてくる、機能していく可能性というのは何かお考えですか。

舟木：愛媛県今治市 S 地区で灸の調査を行った際に、元々地域社会のなかでお灸というのは盛んに行われていました。しかし、彼らは鍼灸師にコンタクトを取って行っていたわけではありませんでした。我々は鍼灸師なので自身の生活や治療院経営のためにお金を稼ぐ必要があるのですが、今後のお灸の普及を考えると、そもそもお灸をする人口を増やさなくてはならないと考えています。そのためには、地域社会で行われていたような有償のお灸以外のものを取り入れていく必要もあるのではないかと思います。私は、それが鍼灸師と持続可能な社会との繋がりにとって重要であると考えているところがあります。

形井：他の先生方どうですか。今のような考え方、どのように考えられますか。

熊野：事業を行ってきた人間の視点からいうと、今の伝統的な資本主義というのは、資本家が資本を集めて資本の現場で、先行投資で、拡大生産を行うという資本主義です。鍼灸の世界というのは、皆が健康になるかどうかは、生産現場で確認することではなくて、生活現場や社会の中で確認して、あの人はこうなったのだとか、あの人の歩き方を見ていたら腰が痛んでいるなというような、社会の中から価値判断をして鍼灸で治すというように、社会からヒントをもらって、価値を還元するというやり方です。伝統医療も含めてです。我々が立っている資本主義というのは、資本家が資本を集めて現場で拡大生産をして資本を増やすという領域には、初めから方程式が合っていないのに、合わそうと無理をする。逆に今の資本主義の課題を解決するために、社会を健全にして、社会的価値を生産現場で作るとい

うような、むしろ鍼灸学の方々のポジショニングに資本主義を、方程式を変えるほうが社会がよくなるのではないかなと思います。

形井：ありがとうございます。他の先生いかがですか。小野先生。

小野：舟木先生に質問です。日本の鍼灸文化がすたれていったターニングポイントの時期というのは、いつ頃の年代だと思われませんか。

舟木：現時点の私の考えですと、日本の社会における鍼灸文化がすたれていったのは、鍼灸の制度化とリンクしてくるのではないかと思っています。極端な立場かもしれませんが、鍼灸師が庶民のお灸文化を奪ったのではないかと思っていますところがあります。まだここは十分に実証できていないのですが、よく、鍼灸がすたれた原因は、近代西洋医学が普及したからだと言われるのですが、実はそうではないと思いはじめています。S地区の人たちの中には、病院ができては様々な理由で病院には行けずに、地域の中でお灸を実践してきた方もいます。一方、調査をしているとS地区の人だけでなく様々な人から、「今は鍼灸って免許がないと出来ないんですよね」と言われることがあります。そういう声を聴くと、近代西洋医学が普及したからではなく、鍼灸師という資格制度ができて、鍼灸は免許がないとできないものだという認識が広まっていくことによって、庶民のお灸がすたれていった可能性があるのではないか、というのが今の私の考えです。

小野：はい、ありがとうございます。私の発表の中で、1973年は今日の日本の医療制度の雛形が整備された福祉元年と呼ばれる年であり、現在、我々が享受している医療サービスの基礎が築かれた年です。また、同年に1県に1校医科大学制度が第二次田中角栄内閣で閣議決定されています。また、この時期に高度経済成長と列島改造論が行われ、田舎に住んでいる方も、高速道路を使って都心部にアクセスできるようになり、都心部の高次医療機関を受診できるようになっていきました。この時期の民

俗学を含む文献を当たると、この時期を境に日本の鍼灸やお灸も含めた民間療法が廃れていく印象を受けています。その代わりに日本はどんどん物質的に豊かになっていき、電気やガス、水道など、自由に使えるような状態になっていきます。それに伴い、鍼灸師も制度化の中で専門性というものをより強調していくというような状況になっていくと感じています。その辺りは舟木先生どうでしょうか。

舟木：確かに私も民俗学における灸の文献を見ているとそのように感じます。『家庭画報』の1968年2月号には、「灸の効用」という特集が組まれており、石原明と深谷伊三郎が担当している。この特集の冒頭は「ミニスカートの時代にくお灸のはなし」とくると、いかにも時代錯誤めいて聞こえるかも知れませんが、実は、このお灸がいま静かなブームを呼んでいるらしいのです。」といった記述があります。昭和後期には、お灸は「過去使われて」いたという記述が多く出てきている印象があります。そうすると、今の小野先生の話と関わってくるものがあると思います。

形井：舟木先生が社会鍼灸学研究会の会誌に投稿して頂いたお灸の罰の話。その視点で先程話されたと思うのですが、厳密にいうともう少し早いんですね。戦後に制度ができています。またその前から営業取り締まり規則のような形での規則で、制度的なものがあったのですが、戦後明確に、鍼灸・あん摩の制度ができて、その辺りからということを指摘されていますが、勿論、それが現実的な社会の中に表現され始めるのが1970年代という、タイムラグがあるという見方が当然できると思うのですが、そこはどうですか。

舟木：お灸の罰の話を書いた時は、教育の変遷の中で変わっていったという考察をさせて頂きました。あの時は、明治・大正期あたりから人々の疾病観が教育によって変化し、それに伴いお灸の治療の意味合いが罰に変わっていったという話を書きました。その影響が1970年代になってタイムラグで出てき可能性に繋がるかということ、

そこは直接繋がらないのではないかと思います。民俗誌をみていると、第2次世界大戦以前からお灸というのは徐々に廃れていっている部分があると思っています。例えば二日灸という灸の年中行事は、戦前には失われています。二十日灸という行事もまた、戦前から戦後にかけて失われていきました。あくまでこれは灸の行事であって施術とは意味合いがことなるため、行事として廃れていったのかお灸として廃れていったのかは明確になっていないのですが、このことから戦前には徐々に廃れてきた可能性はあると思います。それが、制度化によって加速した可能性はあるかと思っています。

形井：はい、ありがとうございます。そこら辺をさらに研究で詰めて行って頂けると皆さん納得できる場所が出てくると思いますので、またよろしくお願いします。では、少し話題を変えます。

小野：はい、それでは話題を変えて、熊野先生のお話では、日本の鍼灸師も含めて鍼灸と日本の伝統医療に流れている「気」の考えや、東洋思想をもっと活用していったらどうかということでした。これは他の先生にもお尋ねしたいことです。鍼灸師を養成する際に、東洋思想や気概念を用いる伝統医学理論を教育されます。但し、それを身に着けている鍼灸師はどのくらいいるのでしょうか。現実には、鍼灸師養成教育の約7割は近代医学の教育科目で、残り約3割が東洋思想を含む伝統医学理論の教育科目となっています。そのような教育科目構成でなければ、国家試験には合格しないというのが現状です。実は、近代医学を理解し、学ぶことは簡単です。我々は、小学校から近代教育を受けています。我々はその延長線で、時間をかけさえすれば、近代医学の知識を身に着けることができます。しかし、東洋思想や伝統医学理論で扱う内容は、現代では失われつつある内容です。例えば、十二節季や二十四節季という歳時記が、現在の日本社会では失われつつあります。これらの歳時記が失われていく生活の中で、現在の人々にとって、歳時記に沿

った生活様式を前提とした東洋思想や伝統医学理論を学ぶことは、非常に困難です。そこで、熊野先生のご指摘に対し、鍼灸師はどのように応えるのでしょうか。形井先生はじめ、是非、皆さんにお尋ねしたいです。

形井：はい、いかがですか。

山田：日体大の山田江理男と申します。熊野先生のご発表の中で気思想というのが、東洋医学の思想の代表的なものとして述べられていたと思うのですが、私はむしろ心身二元論と一元論の方がもしかしたら根本的なことにあるのかもしれないと考えました。近代の行き詰まりの部分に関しては私も同感で、ハンナー連とが指摘しましたようになってしまって、非常に消滅的な形になって、結局自ら近代では行き詰ってしまうという。しかし、デカルト以降の人間論が基にあって、そのように説明があったと思うのですが、東洋医学の従事者が一番根本にあるのは、心身一元論ではないかなと思うのです。それが東洋医学の身体観が普及することによって、社会も変わると。その考え方も普及しますので、社会的な変革にも繋がると考えたのですが、いかがでしょうか。

熊野：心身一元論は、大きな意味での生命論ですね。それは非常に大事だと思うのですが、僕は『禅』の研究で、西田幾多郎が言った絶対矛盾的自己同一という考え方、陰陽があつてこそナチュラルがあるという。その曖昧とか、複雑というものは、工業ではそれは非効率になるので棄てていったのです。確実なものだけ選んで、より確実にするという工業社会というものが、この東洋思想的な曖昧とか、動的に均衡をとっていくとか、気持ちが萎えれば身体に影響がでるとかというような関係性ではない、いいものだけ取るという社会がすべての根源にあると思うのです。

思想的なことより、鍼灸師は身体に触る仕事をされているので、身体に触るということは、患者さんとの安心感の中で治療は行わないと効果がでないと思っています。そうなった時に、気の流れに食事の流れ、

意識の使い方とかで、生活に影響を与えるようなご指導もできるはずなのです。個々の生活が変われば求める商品が変わり、商品が変われば、企業は変わり、企業が変われば産業が変わり、産業が変われば社会が変わり、社会が変われば、意識が変わっていくというような、大河の一滴のような考え方は身体を通じて伝わる可能性があると思っています。そこが目的論になって、肩こりが治って、腰痛が治ってよかったですね、だけになってしまったら、それで東洋思想が技術論になってしまうことの方が、気が繋がっていかないのではないかと思います。答えになっていないかもしれないけど、生命力の方に心も体もあるというのに同意します。

山田：それは、肩こりが治ったということは、二元論だと思います。だから、心身一元論の身体観が普及すれば、先生がおっしゃったことに繋がるのではないかと。現実には患者さんを施術していて、症状だけを捉えても治らない、家全体まで包括して、介入しすぎかもしれないのですが、色々な事まで総合的にホリスティックに対応しないと症状が改善できないという問題に当たってまして……。

熊野：その時に、先程の小野先生と舟木先生の議論であったように、1970年代の高度成長というのは何をもちがらしているかという効率なのです。田舎において、エネルギー革命をもって、薪がいっぱいあるのにガスを使うような、牛がいるのにトラクターを使うような、そういう効率が始まるんです。多分、恒常的な内的な気候性だけど元気になるというような作業は、対処ではなくて根本治療なので、効率より効果が重要で、効率は人それぞれで、早く効果がでる人もいれば遅れる人もいます。効果重視の医療というのが、効率に巻き込まれてしまったのが、先程の小野先生と舟木先生の議論で、繋がっていくと思います。工業というのは不確実を捨てた。でも、自然というのは不確実のかたまりなので、曖昧で、うたかたで、あてにならない、弱さの集合体なのです。でも、弱さの集合体が関係し

ていたらレジデンスの強さを持っている。決して弱さではないというのが東洋的な発想ですね。でも、二元論で言ったら、良いか悪いかということに分けていって、強さの証明をしたら、人工的と機械的になってしまったということの気づきが今起きていると思います。弱さは決して弱みではないのだと。でも、弱さが繋がらなければ脆さになるのだということが、鍼灸の思想と一緒に思います。弱さの哲学的なことで社会に訴えるしかないと思います。

山田：近代以降の価値観が払しょくできないとか、すでに我々も小野先生もおっしゃられたように近代の考え方に染まっているように感じますので、予防医学といったときに、予防医学といった言葉が近代医学的だと思います。病気にならないために、私はその前に体育とか体と育むことだと思うのです。それが医療に先立つものだと思います。けれど、どちらかという後手の方になっているのではないかと。何かしないための予防の考え方になっているのではないかとというのが、そもそも変わってきているのではないかと感じました。ありがとうございます。

形井：ありがとうございました。小野先生、このテーマそのくらいで大丈夫ですか。

小野：このテーマは他の方にもお尋ねしたい、実は、本質的なことだと考えています。

形井：では、もう少し続けますか。

小野：はい、これは参加されている皆さんにもお尋ねしたいことです。例えばドライニードルなど、様々な近代医学的な鍼の技術が北米で注目されています。鍼灸は、単なる物理刺激なのではないでしょうか。先程、熊野先生が指摘された技術論から言えば、おそらく鍼灸は鍼灸師が担わなくてもいいのではないかと話にならざるを得ません。つまり、鍼灸師の存在意義に関わる話だと考えられますので、是非、先生方のご意見をお聞きしたいと考え質問しました。

形井：今井先生に質問がチャットであります。

今井：先程、種村先生からご質問がありまして。鍼管のリサイクルは個人治療院でもできるのかという質問を頂きました。個人治療

院でも十分に可能ですし、鍼の混入だけを避けて頂ければ RPM ができると回答させていただきました。

形井：今井先生が発表されたものが、今後日本中の鍼灸治療院で鍼管を集めて効率よく、燃料に変えていくというような動きになっていくような方法論、どのように進めていけばよいのか。という種村先生のご質問ですね。

今井：種村先生、どうでしょうか。

種村：ありがとうございます。こんにちは。個人病院でもできる何かあればと思い質問させていただきました。多分、考えていらっしゃる先生方はたくさんいらっしゃると思いますので、末端の先生達も何か貢献できればと思いました。回答、ありがとうございます。

今井：はい、ありがとうございます。実際、RPF化というのは、いわゆる日常の廃プラ処理にのるものですので、体液のついていない物に関しては、鍼管とパッケージは一般ごみとして出して頂ければ RPF になります。何かムーブメントをするというよりは、そういうことを知るとということが鍼灸の中ではエコロジーに繋がると。それで、またそのエコロジー化に繋がって、SDGs の根本的な課題や命題は、先程の熊野先生がご説明された中の問題や課題が繋がっていくと思っています。ありがとうございます。勉強になりました。

種村：ありがとうございます。

熊野：今井先生。よろしいでしょうか。今井先生の発表は、かなり今世界の動きからすると変わってきていまして、RPF 代替燃料に関しては、ヨーロッパのサーキュラーモデル化すると、サーキュラにカウントしなくなっているのです。どちらかという、クラシックというものが化石燃料に対する開発の資金も含め圧が弱くなっている。海洋プラスチックを含めて地球の生態系の分解速度に合っていないという規範の中で、生態系の悪影響を起すということで、プラスチックの考え方はレイヤーを変えてリサイクルする考え方ではなく、炭素循環という考え方になっています。ポスト

コンシューマーという、消費者のその先という考え方で、例えば花王とかライオンとかというプラスチック容器を売っているところは、自分たちの責任でプラスチックを回収するという、「利用者責任概念から、生産者責任概念」が世界の潮流になっています。ですので、今、足元は今井先生がおっしゃたことは良いことなのですが、時代をもう少し伸ばして言うと、プラスチックを使って売っているメーカーさんはそれを回収することになっていると思います。そして、ケミカルリサイクル、マテリアルリサイクル、もう 1 回 PP というものから PP を戻すというのが、マテリアルリサイクルなのです。これは資源化すればするほど、劣化もするので、今注目されているのがケミカルリサイクル、C と H と O に再分解して再結合させるという、こういう流れになって、廃棄物は貴重な原料になるという。それまで生産コストに入れようという流れが 1 つあります。それから、私がびっくりしたのは、鍼の使い捨てのことをこれだけ真剣に議論されているということです。我々環境の専門家からいうと、使い捨てというのは、例えば悪くないと言うと語弊がありますが、割り箸というものも使い捨てなんです。清潔さを保つという。割り箸が間伐材の原料を超えない範囲で割り箸を使い捨てするというのは、これは環境的に良いのです。問題は間伐材を使わずに、主伐材を割り箸にしたならこれは問題です。同様に使い捨ての鍼、ステンレスなら貴重なクロム、ニッケルが入っているので、これはそれが枯渇しない範囲で回すというような。もう一度回収して衛生を担保して、うちの鍼を使ってくださいというメーカー側のサービスになってくる時代になっていくと思います。むしろ皆さんはそれをメーカーさんにプッシュの方がサーキュラーモデルの先進国になると考えます。今、リサイクルシステムからサーキュラシステムに移行していくという方が世界の流れだということを、申し上げました。

今井：熊野先生と全く同じ考えでして、マテリアルリサイクルとケミカルリサイクル、こ

れがプラスチックリサイクルに関しては一番王道だと思います。また、業者がそれを回収して再度利用できるというところまで行けたら、これは素晴らしいと。ただ、今現在のところで、その段階を見据えて、議論をしていく必要があると思います。実は、先日うちの大学入試で高校生が受験しに来るわけですが、高校でSDGsについての調査と学習をしたという学生が来ました。その学生に、SDGsを学習した以上、鍼灸の世界で何か思うことがないか尋ねたら、ディスプレイの鍼を1本1本捨てるのがもったいないと言った学生がいました。私自身は、鍼管の再利用はともかく、鍼に関してはというところがあったのですが、鍼の金属の再利用ということを考えてときも来るのではないかと、その学生の言葉でピンとききました。今、熊野先生も同じことを言ってくださったので、人の体に入った鍼、体液が付いた鍼が再利用できないではなくて、業者がそれをきちんと引き取って、洗浄、滅菌して、きちんとしてクリティカルパスの中に入れて再利用という時代も将来的には、言っていってもいいのかなと思っていますので、熊野先生、心強いお言葉ありがとうございます。

熊野：多分、それが気が繋がることだと思うんです。循環というのは、気が繋がっていくものが繋がっていくということで、そこを関係性が切れていかないのです。繋がっていきます。そこらへんは、皆さんの思想的にも合っているのではないかと思います。

今井：今現在、決して人に打った鍼を無条件で循環したほうがよいという意味ではないですよ、熊野先生。

熊野：例えば溶かしてもいいと思います。衛生ではなく、規格がシビアな原料に戻すということです。溶かすことで1000度以上の温度がかかるので、完全滅菌できますので、そういうことが大事だと思います。今、ブロックチェーンで、原料が全部共通化している。世の中の流れはそっち側に行っています。

今井：ありがとうございます。

形井：ありがとうございました。鍼の話はそこ

らへんで大丈夫そうですね。今井先生チャット見れますか。

今井：はい。今、津嘉山先生からの質問で、鍼管の材料にはメーカーによって若干の違いはあります。ですが、油化技術、先程のケミカルリサイクルに関しては、ある程度の材質は多少混入してもできるというふうになっています。また、RPF、固形燃料に関しては、樹脂、プラスチック、紙、それらをぎゅっと凝縮して燃料化するので、あまりメーカーによって材質の違いは問題となっていません。以上です。

形井：はい、ありがとうございます。それでは、もう少しお話したかったのですが、時間ですので、小野先生、気の話は、先程熊野先生がまとめられた、循環が気をベースとして循環に繋がるのではないかとというところで、今日のところはまとめさせていただきます。また、別の機会があればその話も含めてできればと思います。小野先生、簡単にまとめの話をいただけますか。

小野：肝心なところが議論できなかったという、心残りがあります。いずれにしても、環境問題にかかわることは、我々自身に突きつけられている21世紀の大きな課題です。結局、日本の鍼灸師は、近代国家で生きており、近代科学、近代医学を学んできたという経緯の中で、鍼灸を生業としている方が殆どだと思います。この現実の中で、各鍼灸師の思想自体も近代の影響を受けており、近代科学が絶対視している方が多いかと思います。しかし、その結果が環境を破壊してきたことに対して、どのように対応していくのでしょうか。鍼灸師の立場で、伝統医療の立場で、環境問題にどのように対応できるのでしょうか。それを考えなければ、鍼灸もいずれ近代医療と同じような道を歩んでいくことになると考えられます。それが、発展の道か、滅びの道かは分かりませんが。なぜなら、近代医療と伝統医療の理論は、根本的に違いはないということになり、鍼灸はドライニードルでいいじゃないか、鍼灸師ではなくても、鍼灸は誰がやってもいいじゃないかということになるからです。この議論を避けては、

おそらく鍼灸を含む伝統医療や鍼灸師には未来はないと私は考えています。環境問題から、鍼灸や鍼灸師の存在意義を問うことは、鍼灸や鍼灸師の未来を考える上で、今後、必要不可欠になると考えています。

形井：はい、ありがとうございました。今日のテーマは、これから鍼灸界で広め。議論していかなければいけないテーマであろうと思います。切り口はいくつかあると思います。次の機会に深めていければと思います。